

20.8.2. 平和聖日(聖霊降臨節第10主日)

「神の国は、義と平和と聖霊による喜び」

皆さん、おはようございます。今朝、8月の第一主日は、教団の暦では平和聖日となります。世界の平和のために共に祈り、平和の君である主イエスが山上の垂訓の中で教えられた御言葉、「平和を実現する人たちは幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。」(マタイ5章9節)とのメッセージに心の耳を澄まし、深く考える時でありますように心から願っています。今年、2020年の夏はコロナ禍であると共に、戦後75年の節目となる年でもあります。この新たな月が平和について熟考し、世界平和を希求して祈り続ける時でありますようにお祈り致します。

さて、本日はいつものIコリント書から離れて、日毎の糧の本日の聖句であるローマ書14章10～23節の御言葉に聴きたいと思えます。先ず内容に入る前に本書の概観とその背景について、おさえておきたいと思えます。ローマの信徒への手紙の著者はコリント書と同じく使徒パウロによって紀元56年頃、3度目の伝道旅行においてコリント滞在中に書き送った手紙と言われています。ですから、順番的にはコリント書が書かれてから数年後に、このローマ書がパウロの手によって執筆されたと思われまゝ。また、本書は当時の世界の中心であるローマにある教会に対して、福音を正しく理解してもらうために、キリスト信仰の教えの核となる部分について組織的に書き記されており、キリスト教の憲法であるとも言われています。ローマ書の内容に関しては大きく3つに区分することが出来ます。先ず第一にパウロは福音の本質的な部分に関して、1章から8章の中で述べています。パウロは、「わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。」(1章16節)と語り、キリストの福音が万人にとって必要なグッド・ニュースであることを告げています。二番目に9章～11章までが、神様の選びの民であるイスラエル民族の救いの問題について扱っています。選民であることにあぐらをかき、不信仰に陥ってしまったイスラエルの民にも救いの希望が与えられていることが書かれています。12章以降、本日のローマ書14章を含む15章までは、福音を信じる者の実践的な事柄について触れられています。クリスチャン生活の原則や教会での奉仕について、また、社会生活における訓戒について述べてきたパウロは、本日のローマ書14章において、教会生活における人間関係の秘訣について述べています。本章の前半部分では、教会内において信仰の強い人がいる一方で、信仰の弱い人々、信仰的に未熟な人たちがいる現実の中で、兄弟同士、お互いに裁き合うことをやめなさいということが述べられていました。お互いに裁き合うことをやめて、相手を主にある兄弟姉妹として受け入れて、互いに徳を高めるようにということが勧められていました。また、教会内で食べ物の問題や特定の日の問題を巡って、各々受け止め方や考え方の違いはあっても、神を信じる者はその根幹において両者は共通しているというのがパウロの主張でありました。つまり、食べる人は主のために食べ、逆に食べない人も主のために食べないという事において通底しているのであるから、突き詰めれば、その信仰的な生き方は同じであると言うのであります。私たちは誰一人として自分のために生きる者も死ぬ者もない、私たちは生きるのも主のために生き、死ぬのもまた、主のために死ぬ(8節)、というのが、異邦人の使徒として召されたパウロの信念でありました。

本日の聖書箇所である14章11節では、旧約の預言者イザヤの言葉を引用しながら、終末時の主の審判について告げられています。

生きて働いておられる神様のみ前に「すべての膝は、わたしの前にひざまずき、すべての舌は、神をほめたたえる。」と、各々の信仰的な判断による是非とその言動について、やがて全てをご存知である主の判決が下されるのであると告げています。だから、お互いの違いを批難し合うのではなく、兄弟愛と広い心とをもって信仰生活を送るようにと、パウロは戒め、勧めています。次の13節以降最後の23節までは、各々裁き合うのではなく、兄弟愛をもって歩むようにとの勧めについて述べられています。また、彼は兄弟の前に妨げとなるものや、つまずきとなるものを置かないように決心せよ(13節)、と強い戒めの言葉を告げています。このことは具体的にどのような事柄について言っているのでしょうか？パウロがこの所で繰り返し指摘する「汚れたもの」とは、おそらくIコリント書の8章においても触れられている「偶像に供えられた肉」の問題について言っているのだと思います。使徒パウロの生きた時代、偶像に供えられた肉の一部が市場に出回り、一般の人々にもそれが売られていたと言われています。問題は、そのような偶像崇拜のために用いられた肉をキリスト者が買ったり、友人から食事に招かれた際、それを知らずに食べたりしても良いのか？という問題でありました。コリントの教会のみならず、ローマにある教会においても、異教的な背景とその影響下にあり、教会内部において意見や考え方において対立が生じていたのだと思われます。しかしながら、パウロはこのデリケートな問題に関して、「あなたの食べ物について兄弟が心を痛めるならば、あなたはもはや愛に従って歩んでいません。食べ物の中で兄弟を滅ぼしてはなりません。キリストはその兄弟のために死んでくださったのです。」(15節)と告げています。パウロ自身は、おそらく飲食の問題について自由な考え方を持っていたのだと思いますが、良心の弱い人たちの立場を考慮して、彼らをつまずかせないように十分な配慮をすべきであると告げています。互いに意見の異なる問題に関して、教会生活における大切な心得は、兄弟愛を第一に優先して歩むようにと教えているのであります。その大きな理由として、パウロは「神の国は飲み食いではなく、義と平和と聖霊による喜びだからです。」(17節)と述べています。ここで言う「神の国」とは、天国というよりもむしろ、神のご支配の下にある現在の私たちの信仰生活と言っても良いかと思えます。また、「義」というのは、神様と隣人に対して果たすべき義務を指し示しており、それは、思いやりや哀れみの心を表しています。「平和」とは、神様との正しい関係性のみならず、私たちと隣り人との平和な関係を含んでいます。そして、その源泉となるのは神の霊であり、そこには聖霊による喜びが伴うのであると教えています。聖霊による喜びとは、利己的な事柄をさしているのではなく、弱い立場にある人々の幸福をも願う、広く寛容な心をさしています。それ故、「汚れているものは何一つない」と考える強い人々も、食べ物の中で兄弟を無下に否定するのではなく、互いの交わりの中で平和に役立つことや、お互いの徳を高め合うことを追い求めようではないかと、パウロは強く勧めているのであります。

本日の日毎の糧の聖句に示されたパウロの言葉、「神の国は、飲み食いではなく、聖霊によって与えられる義と平和と喜びなのです。」との御言葉を各々の心に深く刻み付け、私たちを取り巻く社会と、この世界に主の平和が実現しますように、一日一日、祈り続けてゆきたいと思えます。緊迫する米中関係においても、両者の和解の道が開かれ、コロナの終息に向けて、互いに一致協力することが出来ますように祈りたいと思えます。神の国の本質が、現実の私たちの日々の日常生活と交わりの中で実現しますように、日々御言葉に聴きながら、この月を過ごしてゆきたいと思えます。